

# Report レポート

(一財)北海道開発協会「北海道における地域コミュニティに関する調査研究」レポート④

## 郡上市和良町にみる 移住者の真摯な実践が 周囲に及ぼす効果 (前編)



林 琢也 (はやし たくや)

北海道大学大学院文学研究院 准教授

青森県生まれ。筑波大学大学院博士課程生命環境科学研究科修了、博士(理学)。首都大学東京(特任助教)、岐阜大学(助教・准教授)を経て、2019年4月から現職。専門は農村地理学、経済地理学、観光学、地域づくり論。著書に『役に立つ地理学』(共編、2012年、古今書院)、『長良ぶどう発達史』(編著、2013年、長良ぶどう部会・記念誌出版実行委員会)など。

北海道では、過疎化や家族形態の多様化などを背景に、地域コミュニティによる共助の取り組みやセーフティネットの役割が増えています。当協会では、地域課題の解決に向けた支援方策の提言に向けて「北海道における地域コミュニティに関する調査研究」に着手しました。

研究会では、構成メンバーであるそれぞれの委員がこれまで行ってきた調査研究の成果等をもとに議論を深めています。これらの内容を委員からの報告を中心に皆様にお届けします。

### 1 はじめに

近年、田園回帰という現象や潮流に注目が集まっている。狭義の田園回帰は、農山村への人口移動を伴う移住を指すものであるが、広義には農山村への都市の若者のまなごしや社会全体の農山村志向を含むものとされる(筒井 2016)。そして、小田切・筒井編著(2016)は、移住者が農山村住民との相互関係の中で暮らしを

成り立たせていく点に注目する「地域づくり論的田園回帰」が現在の重要なテーマ・課題であるとしている。こうした議論は、俯瞰して捉えることで政策論への貢献という意義を有している。一方、よりミクロに移住者個人や周囲の住民の意識や行動に焦点をあてた研究を行うことは、移住者の日々の実践や働きかけ(意識・無意識の双方を含む)が結果として、地域住民や農村コミュニティにポジティブな影響を及ぼし、それがさらなる移住者への支援や協力を促し、彼ら彼女らの暮らしの満足度を高めることに繋がるという好循環の仕組みを考察するための一助になるといえる。

そこで、本稿ではIターン就農者を取り上げ、配偶者や懇意にしている地域住民、他の移住者との関わりを明らかにすることで、移住者の実践が自身や周囲に及ぼす効果を考察することを目的とする。その際、①移住者自らの望む生き方の追求と真摯な姿勢、②夫婦間の相互補完関係、に注目し、調査協力者の語りを中心に分析した。前編となる今号では、①について考える。事例地域は岐阜県郡上市和良町で、調査協力者への複数回に及ぶ半構造化インタビュー(2018年8月～2024年6月)によって収集した情報や資料・データを使用している。

和良町は、2004年に誕生した郡上市を構成する旧郡上郡7町村の中の1つである。2020年国勢調査の人口は1,536で、合併直後の2005年(2,151)と比較しても28.6%の減少となる。同期間の世帯数は708から656と7.3%の減少にすぎず、高齢化率が36.5%から48.6%に上昇していることも踏まえると、高齢の独居世帯や夫婦のみの世帯が増えていることがわかる。こうした中で2010年頃から地域づくり活動を精力的に進めてきたのが「和良おこし協議会」(以下、「協議会」と称する)である。そして、協議会の活動として2015年度より本格化したのが移住・定住支援である(林 2023)。本稿で取り扱う移住者も協議会を経由して和良町へ転入している。

### 2 自らの望む生き方の追求

AM氏(30歳代男性)は神戸出身で、大阪の大学を卒業後、都内でシステムエンジニアの仕事に就いていた。田舎で農業をして暮らしたいと考えており、その過程で知り合い、既に移住していたAF氏(30歳代女性、

現在は鍼灸治療院を開業)の暮らす和良町での就農を決意し、2019年に移住した(同年秋に2人は結婚)。当初は町内のB農家の下でトマト栽培の農業研修を受け、翌年に独立した。独立1年目(2020年)の経営規模は10a(ハウス8棟)であったが、2021年には16a(12棟)、2022年には20a(16棟)と規模を拡大している。2023年からは、養液栽培システム(独立ポット耕)<sup>\*1</sup>による密植栽培を導入したことで単位面積当たりの栽植株数が増えたため、アルバイトを雇っている。栽培するトマトの品種は暑い気候に強い「麗月」である。9割以上を農協へ出荷し、残りは「道の駅 和良」への出荷と個人注文に対応している。

AM氏は、それまでの都会暮らしから、初めて田舎に暮らした時の印象(生活の変化)を以下のように捉えている。

AM氏:もともと田舎に行きたかったんで、素直に田舎に住めたのが単純に嬉しかった。なので、生活しづらいみたいなのは、そんなに無いです。まあ、車が必須ということくらい。Y(最初に住んだ集落)は地域の祭りをしっかりやるとこだったんで、月1で練習とか。練習+飲み会に参加した時は結構、衝撃でした。何か獅子舞とかが出てきて、笛と小鼓みたいなので毎回練習してて、本当にこんな今(の時代でも)やってるんだあって。

田舎暮らしにおける人付き合いの重要性は移住の先輩でもある妻(AF氏)から助言を受けており、最初に暮らしたY集落では毎月の祭り(神楽)の練習や飲み会に参加する等、濃密な田舎暮らしに驚きつつも対応していた。結婚後は、農業が本格化することもあり広い家を求めて、町内の他集落へ転居したが、現在暮らすS集落でも、消防団の活動や頼母子講(W会)に参加している<sup>\*2</sup>。W会は会員が毎月1万円を積み立て、一定の金額を必要に応じて順番に受け取る仕組みを採っているため、月に1度は顔を合わせる。飲み会や旅行の他、集落内の草刈りをW会として年2回、引き受けている。AM氏はコロナ禍で集落の活動が停滞していた中、W会があったことで交流する機会が確保されていたことは精神的にも大きかったという。

### 3 農業と向き合い、研鑽を続ける移住者の“真摯な姿勢”

AM氏は、1日の多くの時間を畑で過ごす熱心な農業者である。農協(トマト部会)の研修や圃場見学以外にも、様々な方法を用いて栽培技術や品質の向上に努めていることが以下の語りからも伺える。

AM氏:(部会の研修の他には)新しい技術とかが書かれた(学術)論文を読んだりします。人から聞くっていう方法だと、種苗メーカーの人。技術も知ってて、営業も兼ねている人がいるんで、そういう人から話を聞くとかですかね。あとは主にネットで(生産者の)YouTubeを見るとか、そっちの方が多いですね。トマトの先進地というと熊本の方なんで。八代トマトとか、阿蘇の方ですね。そっちの方が本格的なので。熊本でも岐阜と同じやり方でやってる、涼しい山の上の方とかがあって。YouTubeで公開してる人は熊本の農家もいますし、他のところの人もいます。トマトって本当に研究され尽くしている作物なんで(キーワード検索すると)いっぱい出て来ます。

農学系の論文を読み込み、新しい技術に詳しい種苗メーカーの営業担当から話を聞き、インターネットでトマトの栽培方法を公開している生産者の動画を視聴する等、多方面にアンテナを張り、努力を続ける姿が見て取れる。

### 4 周囲の反応・意識①～温かく見守る親方農家～

AM氏の研修先であるB農家は、BM氏(60歳代男性)と妻のBF氏(50歳代女性)、息子のBS氏(20歳代男性)の3人で40a(ハウス24棟)の圃場で「桃太郎ワンダー」、「麗月」、「麗夏」の3品種のトマトを栽培している。BM氏はトマト部会長等も務めた農業者であるが、自らの栽培技術については謙遜し、自分達を反面教師にAM氏は頑張ったと、妻(BF氏)とユーモアを交えながら強調し、AM氏の姿勢を評価している。

BM氏:僕が(農業研修の)責任者をやってたんだけど、凄いい技術は無いんで、悪いとこばかり見せとったで(逆に)良かった、本当に。

BF氏:ホント良かったよね。油断するとこうなるぞ、働かないとこうなるぞって、わかったんじゃないかな(笑)。

\*1 トマトをそれぞれ独立したポットで栽培する技術である。自動制御で養液が供給されるため、病害の拡大を抑制できる。土耕栽培に比べて高い収量が可能なことや、培地の温度調整が容易なため気候の影響を受けにくいといった特徴がある。<https://gifutomato.jp/technology/>(最終閲覧日:2024年7月31日)。

\*2 AM氏のW会への参加については、和良おこし協議会事務局長のF氏が「ちょっと顔を出してみたらどう?」と誘ってくれたのがきっかけだという。A夫妻のように協議会を介して転入した移住者の一部は、協議会のメンバーにもなっている。年間を通して様々な活動やイベントを企画する協議会と転入時に接点をもつことは、移住者が住民や他の移住者と触れ合う機会や地域の中に“関わりしろ”を見つける上でも有効である。また、定期的に活動拠点(わらおこし)に顔を出すことで、協議会のメンバーも当該移住者の近況や状態を把握できるため、アフターフォローを充実させることにもなる。

BM氏：AMくんが研修に来た年（2019年）は、「麗月」を作り始めた頃で、（まだ郡上のトマト農家の中では）みんな作ってないけど、うちは先行的にやりたいてって言って作り出してたんですよ。その前の年にまず試作で100本ぐらいもらったのかな、確か。それで作ってみたら、結構作りやすくて。じゃあ今年から、ちょっと（本格的に）やってみるかあと言って、（力を）入れ始めた時にAMくんが来て。このトマトは作りやすいで、やるんやったらこのトマト（品種）やぞって（言った）。～（中略）～ AMくん、来年（2023年）はポット耕という新しい技術をやるんでね。意欲的にやっとなんで凄いなと思います。やる気あるもんで、あれだけのことをやれるんやて。

BF氏：やる気があるから（資金や労働力を）集める努力もするし。

就農を希望する移住者の研修を受け入れることへの思いについては、下記の語りが特徴的である。

BM氏：和良で新しく農業してくれるってこと、有難いですね。それと、うちはこだわるとっていったらアレやけど、そういうのがあったりすると、まあ、それも含めて引き継いでってくれると嬉しいというのものもあるし。

都会から来て和良で新しく農業を始めてくれること、自分達の“こだわり”も含めて継承してくれることの嬉しさを語っている。一方で、研修を終えたAM氏に対して独立後は自分の進め方で自由にやって欲しいため、あまり圃場の様子を見に行ったりはしないという。

BM氏：（自分は）口出すのも好きじゃないし、AMくんのペースでやってくれれば良いと思うんで…。だから、僕はあんまり（AM氏の圃場を）見に行かない。たまに車で通るぐらいだけで。（トマトの師匠としては）もしかしたら冷たいのかもしれないけども。だって上手にやってるからフォローの必要ないもん。今、AMくん、結構収量も上げとるし、うん、大したもんだから僕がフォローするとはこない。もう変に口出さない方がいい。

熱心に学び、技術を研鑽してきたAM氏の農業への安心感と邪魔をしないようにという気遣いが垣間見える。B農家への聞き取り調査（2022年11月）時点でAM氏は既に市内のトマト部会でもトップレベルの反収を上げていた。

## 5 周囲の反応・意識②～共に行動する住民～

移住当時からA夫妻（AM氏、AF氏）と懇意にしている地元の男性C氏（60歳代）は、定年を機に2023年度からAM氏の農園でアルバイトをしている。C氏は和良町内のスポーツクラブ活動（ナイターテニス）で妻のAF氏とも関わりが深く、一緒にスキーに行く等、公私ともに夫妻を応援する住民の一人である。

C氏：自分の中では支援という意識はないんですよ。親しくなって、友達になったんで何かやるんやったら一緒にやろうかとか、僕が何か（町内の）イベントで店出したりする時は手伝ってよとかって感じですかね。特別、移住者だから何か支援せなという強い気持ちはないですね。どっちかって言うと自分が面白がってやってるっていう感じかな。若い子と一緒に何かする機会も無いので。地元には若い子がそんなにいないし、地元の（若い）人は乗ってくる子もいますけど、あんま乗ってこないですよ。AFとかDくん<sup>\*3</sup>とかの方が活動的なんで、こういうことやろうよって言うと話に乗ってきてくれる。

C氏は、親しくなったのが移住者なだけで支援しているという気はなく、むしろ自分が楽しくて一緒に行動していると語っている。その意味ではC氏がAM氏の農園でアルバイトを始めるきっかけも、まさにタイミングと両者の良好な関係性から決まったものである。

C氏：定年後の仕事（小遣い稼ぎの場）を考えてなかったんで4月以降、何か良いアルバイトねーかなあって話をしてた時にAMくんが新しいトマトの栽培方法にするんでアルバイトを探しとるみたいな話をちょっと聞いて。ほんなら手伝ったろうかって言ったら、良いんですか？って言うんで、えーよ、えーよって。そんな感じですね。たぶん、わらおこし（協議会の拠点施設）に何かで集まるとる時やと思う。

\*3 AF氏と同じ2016年に夫婦で和良に移住し、2018年にパン屋を開店した移住者（林 2023）。



上記のような流れからアルバイトをするようになり、日常的に間近でAM氏の農作業を見るようになって感じたことを語ってもらった発話が以下のものである。

C氏：ストイックですね。職人って感じで。そこは向いとるなと思います。きちつきちっとやる性格なんで合ってますよね。（親方農家の）BMくんもそういうタイプやと思います。（AMくんはトマトの圃場に）朝6時くらいから来てると思う。（2024年6月の）今だと日が早く昇るからもっと前に行ってるんじゃないですか。朝から暗くなるまで、ずーっといますからね。凄い、凄いよ。

さらに、C氏は、AM氏が単なる田舎暮らしへの理想だけで就農したのではなく、郡上市で専業農家になる場合のトマトの優位性や環境制御の有効性もきちんと見据えた上で就農した点を高く評価している。

C氏：AMの話の話を聞くとポット栽培の方が管理はしやすいと。反収も良い。しかもデータ取ってやってるからある程度、品質も一定というか管理できるんじゃないかなって思います。水分量と栄養の濃度とか、1日数回、測るんで。それだけ取ってれば、何年かすると、その時の天候とか気温に合わせて（適正な管理方法がもっと）わかると思います。もともと（大学で）情報工学とかが専門だから、理系だなあとホント思います。でも（農業だし）完全にデータだけじゃなく、経験も必要やと思うんで、ずっと畑における真面目さも丁度良いっていうか。（移住して農業を始める時に）話を聞いたら、郡上の中で一番収益も上がるっていうと今のところトマトだからトマトにしたって聞いて、これはしっかりしとるわぁと思ったんです。トマトが一番、就農支援も多かったっていうし。よく考えて、単に憧れだけじゃないなというのは最初に思ったっすね。AMは僕に対して、そんな人は全国にいっぱいいますよって言うけど、あそこまでやる奴そんな、たんと（沢山）はおらんですよ。

AM氏との出会いや日常的な交流の中でC氏が移住者からもらう刺激・影響としては、下記のような意識

や行動に変化が見られたという。

C氏：僕は田舎が好きだったんで（大学時代に暮らした名古屋から）帰ってきたんですけど、それまでは若い子に田舎は良いぞって言わなかったのが、移住者の話なんかを聞いとると、田舎にもいろいろと良いところがあるってわかるんで（自分の中の再認識や自信に繋がるという意味で）、今、（地域の）子どもにテニスを教えてる時に、やっぱり田舎もちょっと良いよって話を機会があればしてるかな。前よりは積極的に若い人に田舎も悪くないよってことは伝えてますね。AMくんのトマトやD夫妻のパン屋、Eくんのゲストハウスとか、具体例を出せるし。

移住者との交流が和良の子どもや若者に田舎の良さを伝える動機付けの役割を果たしていることがわかる。また、AM氏や和良で起業した他の移住者を通して、充実した暮らしを送る若者像を和良の子どもにイメージさせることができる点もそうした行為を後押ししているといえる。

## 6 小括（前編のまとめ）

これまで見てきたように、AM氏は自らが望む生き方を追求するために努力を続け、そのことを周囲の住民は好意的に捉えている。ここで重要なポイントは、支援を引き出すための意図的な行動ではなく、AM氏が農業に全力を注ぐ真摯な姿勢や態度が周囲に伝わっていく中で、結果としてAM氏への理解や協力が「強化」されていったのである。さらに、C氏は地元の若者や子どもに田舎の良さを語るようになっており、地域住民の意識や行動にも好影響を及ぼしていることがわかる。これは移住者が地元の住民やそのコミュニティに対して、自地域の魅力を再認識させる効果をもたらしたといえる。次号では、AM氏の妻で移住の先輩でもあるAF氏の役割や両者の補完関係に注目し、移住における配偶者の存在を考えてみたい。

### 【参考文献】

- 小田切徳美・筒井一伸編著 2016. 『田園回帰の過去・現在・未来—移住者と創る新しい農山村—』農山漁村文化協会。
- 筒井一伸 2016. 移住者と農山村の地域づくり—田園回帰における位置づけ—. 地理科学 71(3): 70-79.
- 林 琢也 2023. 農村への移住・定住に果たす仲介者・支援団体の役割—岐阜県郡上市「和良おこし協議会」と移住者の関係に注目して—. 一般財団法人 北海道開発協会『北海道における移住・定住に向けた取り組み』19-25.